

平成 25 年度 獨協医科大学医学部

センター利用・一般入学第 2 次試験

## 小論文試験問題

(試験時間 90 分)

(平成 25 年 2 月 12 日・13 日実施)

よき身勤めの心を。アーチ型文書式手帳の特徴は、手帳三十六式の「カバー」に記入する文字も式から選べる点。本文も手書きで記入する点。

「おふくろの手帳」は、アーチ型文書式手帳の特徴を活かして、手帳の表紙や裏表紙に、おふくろの心を表現する「おふくろの手帳」の文字を記入する。また、手帳の表紙や裏表紙に、おふくろの心を表現する「おふくろの手帳」の文字を記入する。

「おふくろの手帳」は、手帳の表紙や裏表紙に、おふくろの心を表現する「おふくろの手帳」の文字を記入する。

「おふくろの手帳」は、手帳の表紙や裏表紙に、おふくろの心を表現する「おふくろの手帳」の文字を記入する。

## 平成25年2月12日実施

「おふくろの手帳」は、手帳の表紙や裏表紙に、おふくろの心を表現する「おふくろの手帳」の文字を記入する。

「おふくろの手帳」は、手帳の表紙や裏表紙に、おふくろの心を表現する「おふくろの手帳」の文字を記入する。

「おふくろの手帳」は、手帳の表紙や裏表紙に、おふくろの心を表現する「おふくろの手帳」の文字を記入する。

「おふくろの手帳」は、手帳の表紙や裏表紙に、おふくろの心を表現する「おふくろの手帳」の文字を記入する。

「おふくろの手帳」は、手帳の表紙や裏表紙に、おふくろの心を表現する「おふくろの手帳」の文字を記入する。

「おふくろの手帳」は、手帳の表紙や裏表紙に、おふくろの心を表現する「おふくろの手帳」の文字を記入する。

「おふくろの手帳」は、手帳の表紙や裏表紙に、おふくろの心を表現する「おふくろの手帳」の文字を記入する。

「おふくろの手帳」は、手帳の表紙や裏表紙に、おふくろの心を表現する「おふくろの手帳」の文字を記入する。

問題 次の文章を読んで、以下の間に答えなさい。

九十三歳という、若いときには考えてもみなかつた年齢まで生きてしまつて、いろいろな経験もしてきましたせいか、世間では常識になっているやさしさとか、思いやりといったようなことについて、このごろの私は、自分の経験から「いや、それは違うかもしないぞ」と思うことがよくある。

私自身の生活を思い返してみても、いろいろある。高齢社会といわれはじめた頃だった。ある建築関係のP R誌の座談会によばれて、当時すでに高齢者といわれる年になっていた私は、その立場での発言を求められたのだった。それは高齢者のための住いとしてバリアフリーということが流行語のひとつになっていたが、それについて意見をきかれて、

「車椅子生活や足の動きが不自由になつたら、それは便利でいいと思いますが、健常者には、あまり早々とそんなことを考えなくてもいいでしょう。注意力をなくさないことも大切だと思うのです」

と、私の問題として話した記憶がある。私は自分のことを考えたのだった。家の中ばかりバリアフリーにしても、一步家を出れば外はバリアだらけ、階段だらけなのだ。当時まだ駅にエスカレーターやエレベーターのあるところは少なかつた。

そろそろ足が弱ってきたとき、私のことをいろいろ考えてくれている身内のものが、

「今のうちに、家の中をもっと住みやすく、バリアフリーにしておいた方がいいよ」

とすすめてくれたが、そういう心づかいには感謝しながらも、実際問題としては、私自身が注意力をなくしてしまいそうで、まだこのままがいいと思っていたときだったので。

もともと私の住いは、変な家だが床面はほとんど平らになっている。夫が次々と本を買っては置き場所に困ると物置をあちこちにつぎ足し、それをくり返していた。だから、上がったり降りたりより、紙袋に入れた資料が床に置いてあつたり、積み重ねてある本を蹴飛ばしたり、つまずいたりしないようになると気をつけることには慣れていたので、夫本位の家から、自分中心の一人ぐらしになつても、足元に注意することは忘れてはいなかつた。

夫が亡くなつて四半世紀がすぎたが、まだ私はその古い家でくらしている。真夜中に電気もつけず、家の中を歩いても、何歩歩けば次の部屋のドアがあり、三センチほどの段差があるから気をつけるようにと、自分のからだがおぼえていて注意をうながすのだ。

三センチの段差でも足をあげる力がなくなつたら、私はこの家に住めなくなり、ケアつきのマンションにでも移るか、どこかのホームに入れてもらわなければならないだろうが、今日はできるから、明日のことについてわざらうことはすまいと思っている。人の体力とか注意力は、日々ほどよく訓練されていないと、どんどん衰えていくのではないだろうか。

最近、こんな経験をした。したしくしているある知りあいの娘が、数日、泊まりがけで私がなまけている家事を片づけにきてくれた。彼女のお母さんが私と同年配なので、ふだんはよく世話をしているようだ。私にも親身につくしてくれて、たとえば私が毎朝一回だけ飲んでいる血圧の薬を、朝食のあとで飲もうとすると、さっと立って台所にいきコップに水を入れて持ってきてくれる。

何日もしないのに、彼女が帰つてまた一人の日々がはじまつた朝、薬を飲もうとして、ふと気がついた。

「あら、水を持ってくるのを忘れてる」

思わず口に出してしまった自分の言葉に、やっぱり、人に頼ってしまうとだめになるという思いを深くした。

いつも、朝食がすむと、食器をひとまとめにして台所に運んだ手に、カップを持って水を食卓に、という手順にしているのに、親切な人に食事がすむとさっと片づけてもらい、私はデンと座ったままでテレビなど見ていて、そこにさっと水を持ってきてもらうと、おもむろに薬を飲む、そんなことが数日つづいただけで、もう私は自分の作ったルールを忘れてしまったのかと、びっくりしたり、ぞつとしたりした。

人はちょっと楽をすると、すぐその方が快適なのでそちらに傾いていってしまう。とくに老いてみると、その傾向は著しい。だから一人ぐらしの私はぞつとしたのだ。

何もかも人にしてもらえる生活は、しあわせのようだが、それがいいとは思わない。それは頭では思っていても、からだはできるだけ楽を望むのか、私は数日で変わった自分にショックを受けた。ひょっと気をゆるめたら、無限に楽な方にいってしまう自分に、甘えていたら下降線をたどるだけだと、きびしい声をかけた。

バリアフリーの家に住まないとか、一人ぐらしには、いつも適度の緊張感がなければといっている自分に、裏切られたような思いも持ったが、考えてみれば、年とは関係なく、人間の能力は使わなければどんどん衰えていくことに気づいていたはずだった。

私の幼い頃は計算機などなかったから、ソロバンができなければ事務はできないといわれていた。私は小学生の頃からソロバンを習い、頭の中にソロバンをおいてする暗算も得意だった。夫と二人分の税金の計算だってそれほど努力しなくともできた。

しかし、便利な計算機が使えるようになり、それに頼っていたら、おどろくことに、得意だった暗算ができなくなったことに気がついた。今では、買い物をしておつりをもらっても、それを確かめる暗算もできず、おろおろしてしまうこともある。老化のためとばかりはいえないと思うのは、ずっとつづけていることについては、多少の衰えは感じても、まだそれなりの能力はあると思うのだ。

もう何度も話したり書いたりしていることなので、今さら書くことは気がひけるが、例として携帯電話をアドレスブックや電話番号簿にしている方のためにいっておきたいので、私の経験を書く。

私は妹とかその他の身内のものの電話番号を、短縮機能のある電話機におぼえさせ、妹は1、姪は2、などとおぼえていたら、外で妹の家に連絡したいことができて電話をしようしたら、みんな番号を忘れてしまっていた。これにもおどろいた。

私は家で仕事をしているし、あまり外出もしないので、必要がないので携帯を持たないことにしていた。公衆電話がなくなっているに等しいこのごろ、携帯くらいは持とうかと考えていた矢先、知人が携帯をどこかに置き忘れて困ったという話をしていた。

「あれがないと、生活できないわ。人の住所も電話番号も、みんな入っているのだもの。どうしよう」とあわてた。何もかも記憶させて頼っていた機械を失った人間が、ヘナヘナと崩れ落ちていく姿を想像して、携帯くらいは持とうかと思ったことを取りやめにした。

吉沢久子著 「94歳。寄りかからず。前向きに おおらかに」(株式会社 海竜社)

出題の都合により一部改変

問1. 本文を200字以内で要約しなさい。

問2. 著者が本文で指摘している点について今後どうすべきか、あなた自身の考えを600字以内で述べなさい。

平成25年2月13日実施

問題 次の文章を読んで、以下の間に答えなさい。

八年続いたテレビの仕事を一年間休んでアメリカに行ってきました。心身のバランスをもういちどベターな状態に戻したいと思ったのです。そこでつくづく感じたことがあります。それは、私自身を含めて日本人は大変幼い、ということです。つまり、大人であるという意識がとても希薄なようなのです。社会の一員としての自覚が足りないかもしれません。それは若者だけではなく、日本人全体がそうであると思うのです。

社会の一員であるということは、社会のいろんな人と関わって、自分のエゴだけを通すのではなく、最低のルールを守り、しかも自由に暮らしている……というのが理想的なかたちだと思いますが、どうも今の日本にはルールを守らずに自由やエゴだけを主張している人が多いように感じられてなりません。

例えば、新幹線に乗ったとします。トイレや食堂車に行くとき、通路に立っている人に「失礼」のひとこともなく、押しのけて行く人があります。「失礼」と言ってから、通路を開けてもらって通るということが、最低限、社会との関わりの中ではできなくてはいけないことなのです。それなのにただ押す、しかも黙って、まるで人との関わりを否定しているかのように。

日本のウエイトレスさんはとても丁寧に「おまたせいたしました」と言ってくれます。でも、メニューを持ってきててくれた丁寧なウエイトレスさんに対して、「どうもありがとう」と、どれくらいの人がきちんと応えているでしょう。注文するときも、ただぶっきらぼうに「コーヒー」としか言わないしたら、とても寂しいコミュニケーションだと思うのです。この要領で日本人が海外へ出てもきちんと口をきこうとしないものだから、日本人はいつも怒っているのかと思われてるよ、とアメリカ人に指摘されたことがあります。

アメリカでは日本人を礼儀正しくおとなしくて従順な国民というイメージを持つていますが、現実の日本人が自分たちの評判を落としかけていることは確かなような気がします。

個人につきあえばわかってくれるのかもしれません、シャイだからしようがないという問題を通り越して、“公共的なマナーのできていない人間”と見なされてしまうでしょう。日本の中では、みんなが同じだからということで済むとしても、海外に行くと、日本人のマナーの悪さは本当に目立つているようです。

アメリカで暮らした一年間に、私は公共のマナーということでたくさんのこと学びました。先にドアを開けたとき、ちょっとドアを押さえてあげる、エレベーターに先に乗ったら次に乗る人がいないかどうか確認してからドアを閉める、人の前を通り抜けようとするとき「失礼」と必ず声をかける、「ありがとう」「どういたしました」という言葉を頻繁に使う……、こういう普通のマナーが三度のご飯を食べるより自然に守られているようで、とても気持ちよく思いました。

個人個人がどういう生き方、人生の楽しみ方をしようが勝手だと思います。超ミニスカートをはこうと、髪を赤く染めようと、そんなことは他人がとやかく言う問題ではありません。それ以前にもっと大事なことは、人間として社会との関わりをきちんと身につけることのような気がします。公共のマナーを守り、まったく知らない人に対しても、ごく普通のマナーをごく自然に守ることができたら。こういう基本的なことが成立しない国は、どんなにお金持ちでも貧しい国のような気がします。

日本人は、ある会社に就職すると、その会社のためには誠心誠意尽くします。自分が勤める会社のお得意さまに対しても礼を尽くし、挨拶を丁寧にし、命まで捧げる勢いです。けれども、会社と関わりのない人、利害関係のない人に対しては、とたんに無愛想になる。そんな人に出会うと悲しくなります。二十歳になったからどうのということではなく、これはどんな年代の人にとっても大切なことのように思われます。

会社の仕事に燃えるということはとても大切なことです。しかし会社だけが社会になってしまったら、つまらないじゃないですか。会社の名前を使って、仕事での人間関係はつくることができます。会社の力を借りれば、自分の実力以上の仕事ができる場合もあります。こうして会社の看板を背負い、バッジをつけているうちに、いつの間にか自分の実力を会社の実力と同じと勘違いしてしまいがちです。

同じようなことが今の私にも言えます。私は今、テレビという場所で仕事をしています。知らぬ間に多くの人に顔を知られていくうちに、つい有名人(?)の仲間入りをしたつもりになりがちです。でもこれは、たまたま私の顔がテレビに映し出されているからで、私自身が蓄積してつくり上げたものとはちょっと違います。顔を知られているということと、私自身の仕事が評価されているということはまったく別問題です。当然、私個人の魅力が磨かれているかということとも別問題です。そのところを勘違いしないように、思い上がりないように、他人さまと接し、世の中と接していくかないといけないと、いつも肝に銘じるようにしています。会社を離れ、個人に戻ったときでも、他人に対して心を配ることができるか。魅力ある人間でいられるかが、その人間の価値につながるような気がするからです。

私は自分自身きわめて日本的な人間だと思っています。アメリカに一年間行ってみて、すっかりアメリカにかぶれ、アメリカのことを好きになりましたが、同時に、アメリカ人のように自己主張して強く生きて行くことなど、とうていできそうにないことがよくわかって帰ってきました。

そしてあの一年間のおかげで、かつて諸外国でも一目おかれていた「日本人の良さ」を取り戻すことはできないものだろうかと思うようになりました。忙しい生活を続けていると、私自身もまた、自分さえ良ければという考え方が定着していたような気がするのです。かつては日本人のだれもが持っていたはずです。誠実な思いやりの心、親切な心というものを……。いつの間にか大切な心が失われていくことはとても悲しいことです。

会社から与えられたマニュアルを越え、たまには個人としての関わりを、社会に求めることも大事だと思います。二十代というのはとても素晴らしい時代です。私もふらふらと、いいかげんに過ごしてしまった二十代を超えて初めて、少しだけ自分を眺めることができるようになったのかもしれません。

「ありがとう」「どういたしまして」「ごめんなさい」。ほんの少しでもいい、自分自身の言葉で声をかけ合い、会社を離れた個人としても、魅力ある人間になってください。

阿川佐和子著 「魅力ある個人となるために」(「<sup>たひだち</sup>出発に贈る言葉」PHP研究所発行)  
出題の都合により一部改変

問1. 本文を200字以内で要約しなさい。

問2. 本文は約二十年前に、成人を迎える若者に対して贈られた言葉である。著者が指摘している

日本人の問題点について、あなた自身の考えを600字内で述べなさい。